

interview インタビュー

3月4日、千駄ヶ谷の将棋会館にタイトル戦でお忙しい羽生善治名人・王座を訪問し、対局に臨む際の心構えや同世代のライバルとの関係、勝負に対する考え方や弁護士に対する印象などについてインタビューした。

(聞き手：高岡信男，好川弘之，三森敏明，小島愛子)

プロフィール はぶ・よしはる

1982年に二上達也九段門下，84年初段，中学3年生でプロ棋士になる。89年に初タイトルの竜王位を獲得後，数々のタイトルを総なめにし，96年2月に7つの全タイトルを独占する等，棋界の第一人者。タイトル戦以外の棋戦でも多数優勝し，優秀棋士賞等の将棋大賞も多数受賞。94年2月に都民文化栄誉賞，96年3月に内閣総理大臣顕彰を受け，現在，第18世永世名人の称号に最も近い棋士。著書に「羽生マジック」「ミラクル終盤術」「羽生の頭脳」シリーズ等。

棋士 羽生善治さん

—名人が一番好きな将棋の駒は？

銀でしょうか。以前，僕が指した将棋の棋譜を統計にして送ってくれた方がいらしたのですが，その結果としても銀が多かったようです。

—対局に際して心がけていることは？

自分の持っている力をうまく出し切りたいと，いつも思っています。勝敗については，ある程度受け入れるしかなのですが，自分の中で気持ちが空回りしたり，集中力に欠けたりしたときは，非常に反省しますね。勝っても負けても，その要因は探りますが，後は完全に忘れるということを心がけています。

—対局中に勝ち筋を見つけたときの精神状況は？

将棋の最後の場面というのは，鉾脈を探するような作業なんです。勝つときというのは，必ず1本の線になるような組み合わせがあります。それまでは五里霧中でわか

らないまま掘っていく感じですが，勝ちがわかったところで，「あ，鉾脈がここにあったんだ」とわかる感覚ですね。

—逆に，自分の敗戦を覚悟されたときの心境は？

「投了図」のかなり前の時点で負けだとわかってしまいますので，そこからは，どこで投了するかということを考えていたりします。やはり負けだと思ったときに，気持ちの整理をする時間が，ある程度は必要だと思っています。

—「羽生マジック」と世間で騒がれることについてどう思われますか？

自分が不利になったときは，その状況を一度にひっくり返すという作戦は取らないんです。ちょっとずつ差を詰めていくという感じで戦いを進めていくことがほとんどです。不利なときは，1回相手にミスがあったら追いつける程度の差で進められるようにしています。

—過密スケジュールをこなす中で、ご家族とのコミュニケーションは？

1年のうち3分の1は泊まりで出てしまっていますが、家にいる間は、子供と顔を合わせることは多いですね。私が日本中あちこち出かけるので、地理の勉強にはなっているかもしれません（笑）。

—将棋をしない時間はどのように過ごしていますか？

ポケットしてます（笑）。普段は将棋から離れようという気持ちが強いです。ずっと考えていると煮詰まってしまうので……息は吐かないと吸えませんか。

—1日のうち、どれくらい将棋のことを考えていますか？

日課はないので、いろいろです。ただ、長時間研究したとしても、本当に充実した時間は実は少ないということが多いです。ですから、量より質を重視しています。

—将棋界には名人と同世代の昭和45年生まれのライバルがたくさんいますが、彼らに対する気持ちは？

子供の頃からずっとやっているもので、ライバルという感じもありますが、同じ道を進んできた仲間という感覚が結構あります。やはり皆ここまで来られたというのは、いい意味で切磋琢磨してきた結果だと思っています。

—ご自身の対局の棋譜はほとんど記憶されているとか…。

それは歌を覚えるのと全く同じなんです。歌は最初のフレーズが出てくると思い出せるように、将棋も最初の何手かを動かすと、そのリズムで次を覚えていけます。頭の中で何回も繰り返してその局面のことを考えているので、焼きついているという面もあるのかもしれませんが。もちろん忘れていた部分もありますよ。

—弁護士と棋士とは同じ「士」業ですが、弁護士に対する印象は？

真面目な方々というイメージでしょうか（笑）。実際にはいろいろな方がいらっしゃるでしょうが、芯が通っているという印象があります。

—将棋の世界についてどうお考えですか？

もちろん勝負の世界なので勝ち負けは大切ですが、やはり発見があるというのがやりがいになっています。先ほどの鉱脈の話ですが、この鉱脈を見つけたときが喜びなんです。自分が作り出すというよりも、眠っているも

のを探し出すというイメージです。

—子供の頃からずっと将棋一筋で過ごされてきたのですか？

そうですね。日進月歩で変わっていくものに、どう対応していくか、いつも考えています。同じ将棋をやっているも、全く違うことをまた1から積み上げていかなければならないということが非常に多いので、自分の中でも全く違うことをやっているような感覚なんです。

—勝敗について思うことは？

人には「勝ちたい」という「念」というものがあり、この思いの強さが勝敗を分けると思います。プロ同士では、実は技術的な差はほとんどないのですが、それなのに違う結果が出るのは、そういうことだと思います。

年齢を重ねるごとに、余計な邪念を振り払って勝負に打ち込むのはすごく難しいと感じるようになりました。ただ、僕の場合は、対戦相手がトップクラスのプレイヤーであることが多いので、自分の気分が乗らないときも、指しているうちに相手の「念」で自分まで感化されてくるのが結構あります。

—「天才」とはどのようなものだとお考えですか？

最近、「才能」ということを考えることがあります。以前は、ひらめきのようなものが「才能」なのかと思っていました。けれども、将棋の世界にずっといる中で、そういうキラリと光るセンスを持つてる人が伸びているかという意外とそうでもなくて、地道にコツコツ研究している人の方が、長い目でみると伸びていることが多いということを感じています。

僕が今の段階で得た結論は、「才能」を持った人というのは、続けることができる人なのではないかということです。その瞬間だけ力を発揮するのではなくて、少しずつであっても同じペースで走り続けられることが、「才能」ということなのかな、と最近しみじみ感じています。



勝つときというのは、必ず一本の線になるような組み合わせがある。その「鉱脈」を発見することが、将棋のやりがいであり、喜びですね。